

第1部創作昔ばなし

佳作

佐平とたぬき

鈴木空美

むかしむかし、小さな村に佐平という男が一人でくらししておりました。

その日も佐平は、山へ炭焼きにでかけていきました。

日がずいぶんとかたむいたころ、佐平はもと来た道をのんびりと下りはじめました。

「はらがへったなあ。今日はなにを食うかのお」

「佐平はひとりごとを言いながら、とぼとぼと歩いてみると、くすの木のかげから、たぬきのおやこが、そつとかおを出しました。

「なんだか、おらを見ているようだな」  
佐平はつぶやきました。

すると子だぬきが、おなかをこちよこちよとか

きながら、くびをかしげています。そのようすがかわいらしくて、佐平はにっこりしました。

「おまえさん、ちいさくてかわいいのお」

すると、母だぬきは少しあゆみでて、おそろおそろ声をかけてきました。

「あの、この子が、一どでよいから人間のくらしがしてみたいというのです。たった一ぼんではないので、あなたさまとかわっていただけないでしょうか？」

佐平は、びっくりしました。それに、たぬきのおやこにだまされているのではないかと、心ばいになりました。けれども、子だぬきのまんまるのおめめを見ていたら、

「ああ、かわってやっても、いいぞ」と、おもわず言ってしまう。

それを聞いて子だぬきは、

「わーい。わーい」

と、小さなおててを空にむけて、とびあがってよろこびました。

(こりや、もう二どと人間にもどれんかもしれんぞ。)

佐平は少しおそろしくなりました。

できればにげだしたいきもちでしたが、佐平は心をきめて、母だぬきの言うようにしました。

母だぬきは、

「まず、このはっぱをあたまにのせてください」

と、まあるい手に一まいのはっぱをのせて、佐平にわたしました。

「つぎに、くすの木に手をまきつけて立っててください」

佐平は、言われたとおりにしてやりました。

そのあと、たぬきのおやこも、同じようにまえ足を木にまきつけて立ちました。

そして、母だぬきは、しずかにこきゆうをととのえたあと、

「ぼんぱっぱ！」

と、じゅもんのようなことばをとなえました。すると、一しゅんのうちに、佐平はたぬきに、たぬきのおやこは人間に、すがたをかえました。

たぬきになった佐平は、からだのみがるさにおどろきながら、ぴよんぴよんと、その場でなんど

かはねてみました。

「おじちゃん、おうちはどこ？」

人間のすがたをした子だぬきは、待ちきれずうれしそうにたずねました。佐平は、むきをかえると、はねるように走って、自分のうちまで、あんないしてやりました。

うちにつくと佐平は、たぬきらしく土間にちよこんとすわり、人間になったたぬきのおやこをながめました。子だぬきはうれしそうにいろいろのまわりをとびはねたり、寝そべったりしています。いつぽう母だぬきは、おぼつかない手できのこ汁を作っています。

母だぬきは、ごはんのしたくがおわると、

「ぼうや、ごはんを食べましょうね」

と、やさしく声をかけました。

「ふーふーして食べるんだよ」

と子だぬきに言いました。子だぬきは口をとがらせて、それはそれはおいしそうに食べました。そのすがたを見ているうちに、佐平はこどものころをおもいだしていました。よく見ますと子だぬきは、佐平の子どものころにそっくりでした。そ

して、それをみつめる母だぬきのまなざしも、あのころの母にそっくりです。

「おっかあ…」

佐平の目からなみだがあふれ、毛皮をぬらしました。

夜もふけ、おやこはあたたかいお布団に入りました。

「かあちゃん、人間はあったかいね。お布団で、きもちがいいね」

と子だぬきがうれしそうに言いました。母だぬきは、子どものあたまをやさしくなでました。佐平は、じぶんの子どもをかせね合せて、幸せなきもちがしました。

「やっぱり、家族はいいもんだあ」

と佐平はつぶやきました。そして、じぶんのしっぽをまきつけて、ねむりにつきました。

よくあさ、目をさますと、佐平は人間のすがたにもどっていました。

「ありや、ゆめだったんだらうか…」

佐平は、うちのなかを見わたしました。する

と、いろいろのあたりに、きのこがどっさりとおいてありました。

佐平は、戸口をあけて、

「また、いつでもかわってやるよお」

と、山にむかってさけびました。

それからしばらくして、佐平はお嫁さんを得ました。やがて、かわいい子宝にめぐまれ、しあわせにくらしました。

おしまい